



第237號 (第 21 卷)

(昭和16年) 3 月 號

卷頭

宇宙を觀る，人生を觀る

隨筆

山 本 一 清

【“アマチュア” といふことなど】

千葉縣の X 氏から手紙が來て，“小槇孝二郎，清水眞一，野尻抱影，岡林滋樹，本田實，木邊成麿，伊達英太郎，改發香場の諸氏は，専門家ですか？ アマチュアですか？”と尋ねて來られた。讀者諸氏が此んな質問を受けられたら，一體，何と答へられますか？

そもそも“アマチュア”と言ふ言葉は“職業家”^{プロフェッショナル}に對立する言葉である。例へば，スポーツなどで見ても，“アマチュア野球”といふ言葉と，“職業野球”といふ言葉とが比べられる。圍碁にしても，將棋にしても，又，政治家などにしても，“アマチュア”と“プロフェッショナル”とに區別される。こうした區別を，ごく通俗的に説明して見ると，

“プロフェッショナル”とは，其れを生活の手段とし，俸給を受けてゐる者。

“アマチュア”とは，生活上からは，何者にも束縛されず，全く自由獨立の立場にある者。従つて，此うした人々は，多くは，他に一定の生活手段として職業を有つてゐる。——勿論，全く無職の人也可なり多いが。

このやうな風に區別して見ると，前記の 8 氏のうち，岡林，本田の 2 氏は“プロフェッショナル天文家”であり，其の他の 6 氏は皆“アマチュア天文家”である。

尙ほ，“アマチュア”は，“専門家”に對していふ言葉であると解する人も世にはあるが，之れは誤りである。“専門家”とは，英語で言へば，Expert であつて，又，言ひ換へれば“Authority”即ち權威者といふ意味にも解される。ところが，ひろく世間を見わたせば解る通り，“プロフェッショナル”は必ずしも専門家でもないし，又，權威者でもない。一々，人の名を擧げて論ずるのは，こゝに遠慮するが，天文學上に於いて，果して誰が權威者であり，専門家であるかといふことは，其の人が天文研究によつて俸給を貰つてゐるか，ゐないかといふ問題と，別にして，考へなければならぬ。世には，簡単に，

“プロフェッショナル”＝専門家＝權威者＝深い知識を有つてゐる人

“アマチュア”＝單なる物好き者＝深い経験や知識を有たない人＝大して權威者とするに足らぬ人

といふ風に考へる人が多いけれど、之れは大まちがひである。“プロフェッショナル”の人の中にも、全く採るに足りない人もあるし、之れに反して、“アマチュア”の中にも、堂々たる權威者や専門家がゐるのであるから、餘り、そんなことに囚はれないで、ものの眞相を見なければならぬ。――只、わが日本國では、學校教育といふ形式にのみ囚はれて、ものを判斷評價する人が多いので、大學などを卒業した人はえらい人に見え、之れに反して、自習獨學の人はつまらぬ人に見えるやうに思ふ人もあるが、之れは大いに注意しなければ、ならない。外國の例を言へば、昔しのコペルニクはアマチュアであつた。

▲自分の身のまはりに餘裕が出来て來たので、昨年末から、郷里に天文臺を建てようと企て、大體の設計を終つて、十一月頃から大工の仕事にかゝつた。最終的な設備としては大小のドーム2つと、特殊望遠鏡2臺、それに氣象觀測の設備も一通り備へたいと思つてゐるが、別に急ぐ必要も無いので、ゆつくりと、考へ考へ建設を進めて行きたいと思つてゐる。去る十一月12日の水星の太陽面經過の觀測を此所でやつたのだが、之れは、只、ポータブルの小さい望遠鏡を使用したのに過ぎなかつた。しかし、ちやうど皇紀2600年の記念として此の建設を始めたことでもあり、其の最初の觀測として、今から約2600年前に人類に發見された水星を觀測したことは幸先き良いことであつたと、氣持ちを良くしてゐる。

場所は、^{クリタ}滋賀縣栗太郡^{カキナカミ}上田上村で、今、東京の科學博物館に陳列されてある“田上隕鐵”の産地なのであるから、天文臺も^{タナカミ}“田上天文臺”と呼ぶことにした。

何よりも先づ最初に一通りの觀測が出来るやうにといふので、年末までに小ドームの建設を急ぎ、口径16センチのエリソン反射鏡を据えつけた。鏡面は木邊氏の御好意により、東京でアルミのめつきをして貰つたので、非常に良いものとなつた。今、この器械は經緯臺に載つてゐるが、近い將來に、米國パロマ山にある有名な“200吋”の反射鏡と同様な形の赤道儀に載せるつもりである。さしあたり、變星や、彗星、小遊星、遊星面、天體寫眞等の研究をやり、將來、大ドームが出来たならば、カプティンの Selected Area の國際觀測の一部を擔當したいと思つてゐる。大體の豫定から言ふと、大ドームの建築は三月末か、或は四月初から始め、八月一ぱいには完成し、是非、今年の火星の接近までには、間に合はせたいと思つてゐる。しかし、今年は、九月に皆既日食があるので、其の方へも勞力を可なり取られるかと思ふけれど、とにかく、今秋

か、又は、來春の佳日を卜して、Opening を公けにやりたい心算りである。

京都から20キロばかり離れてゐるので、空は可なり良い。一般のシーイングも悪くはない。附近に人工燈火の無いことも嬉しいコンディションである。全部が出来上り、Opening もすんだならば、内外の各天文臺とも連絡し、一般の天文家たちにも來遊して貰ひたいと思つてゐるが、今は未だ早い。何れ、本誌の通信欄にも毎號1頁を頂戴して、“タナカミ通信”を書きたいと思ふから、建築や觀測の状況は、それによつて、知つて貰ひたい。

▲この三月には日食と月食とが各々一回づつある。月食は三月13日で、3分3厘弱の部分食であるし、時刻も我が日本や東洋方面一帯でよく見えるやうになつてゐるから、空が晴れてゐれば相當よく觀測されるだらう（本誌天象欄参照）。月食は地球の丸いことを教へる好機會である。之れには寫眞を撮つて見るのも宜い。この晩、月の東隣に乙女座のβ星が輝いてゐるから、この星を狙つてカメラを向け、20分に一度ぐらひづつ露出すれば、面白い寫眞が撮れるだらう。之れは自分がヤーキース天文臺で發明した方法である。拙著“天體と宇宙”を見られたい。

日食は三月27日（世界時）で、日本では28日2時12分から始まる“金環食”であるが、美しい金環が見えるのはリマ、ワンカトヨ、アヤクチャ、マルドナドあたり——つまり、南米ペルウ國の中央部だけで、他は全く南太平洋上である。ペルウは、かの1937年の時以來、日食には特に民衆の興味が起されてあるのだし、サン・マルコス大學には口径13センチの恰好の赤道儀屈折鏡もあるのであるから、必ず何等かの良い觀測が行はれるだらう。詳しくは、之れ亦、本誌の天象欄を見られたい。

（1941—1—10）

辛巳年頭書懷

（訂正再掲——編輯）

乾 坤 曆 改 _テ 瑞 氛 雄 _{ナリ}	喜 色 新 鮮 千 里 同 _シ
銃 後 _ノ 夜 勤 燈 火 白 _ク	社 前 _ノ 朝 拜 旭 陽 紅 _{ナリ}
宏 胸 _ハ 溢 _レ 外 _ニ 扶 隣 _ノ 德	堅 腕 _ハ 充 _レ 中 _ニ 報 國 _ノ 忠
黔 首 _{シク} 宜 _レ 爲 _ス 一 _{スルノ} 心 誓 _ヲ	共 俱 _ニ 招 寄 _キ 泰 平 _{セン} 風

神戸關守畔 改發香塢